

【付録二】——『現代人間学・人間存在論研究』 第一号のための序

本誌では“人間の学”としての新たな人間学を希求する。初刊となる本号では、それぞれの執筆者がいかなる問題意識と立ち位置のもとで“現代人間学”を試み、また“人間存在”を問うのかについて、今後の展望を交えつつ明らかにしていきたい。

その際本号では、われわれはいかなる時代を生活しているのかという問題を、各執筆者の共通課題として設定した。現代人間学を試みるにあたって、なぜ最初に“時代”を問題とする必要があるのか。それは人間を問うというわれわれの営為が、根源的にはそれを問うものが生きる“時代の性格”と不可分なものであること、そしてそれゆえ、ここでは筆者らが社会的、時代的要請のもとでそれぞれに理解している、人間自身を問題とすることへの動機と必然性とをあらかじめ鮮明しておくためである。このことは従来の人間学的試みが、人間を“時代”と切り離して漫然と論じたために、しばしば知識の寄せ集めや半端な一般論に陥ってきたことへの反省も込められている。

とはいえ確かに“時代”を過度に意識することは、学問としての普遍性を損なう恐れがあるという見解もあるだろう。しかしそもそも現代人間学は、人間の“一般理論”というものを求めているわけではない。そこにあるのは、むしろ同時代への立ち位置を示すことによってこそ、〈哲学〉として人間を問い、人間に関する〈思想〉を構想することが可能となるというわれわれの信念である。われわれは、“時代”に規定される人間が背負った宿命的な限界というものを感じている。そしてそれゆえ、ここでは真に時代や人間と対峙したものである限り、あらゆる〈思想〉の試みは肯定されることになるだろう。

「現代人間学・人間存在論研究部会」の構成員は、それぞれに人間学を希求し、共通の土台となる認識を確立すべく議論を重ねてきた。本誌では、まず四年をかけて“第一期”の研究成果を公表していく予定である。この第一期を通

じて、各執筆者はおのおのの人間学的理論構想をいったん完結させることになっている。したがって本号は、第一期全体の“序”としての意味もあるだろう。しかしここで最初に示された問題提起は、この一連の試みの原点となり、やがて繰り返し立ち戻るべき初心としての役割をも果たしていくことになるだろう。

『現代人間学・人間存在論研究』第一号
編集代表 上柿崇英